

アマチュア無線の思い出 ～電波に魅せられて半世紀～

少年の夢と鉱石の輝き

N. K

私の人生を振り返る時、そこには常に「電波」という目に見えない糸が流れていました。昭和の時代、小学生だった私は、同年代の子どもたちが外で遊び回るのを余所に、家の中で電気回路をいじり回すことに没頭していました。当時の宝物は、自分で組み立てた鉱石ラジオやゲルマニウムラジオです。家の周囲にアンテナを張り巡らせ、イヤホンからかすかに聞こえてくるラジオ放送を受信できたときの震えるような感動は今でも強烈な記憶として残っています。それは、何もない空間から情報を手繰り寄せる「魔法」に触れた瞬間でした。私のこの趣味に決定的な影響を与えたのは兄です。高校生だった兄が友人と連れ立って真空管ラジオ製作に興じている姿を私は脇でじっと見つめていました。ある時、たった一つの小さな部品、抵抗器やコンデンサーを交換しただけで、スピーカーから流れる音声の質が劇的に変化したのです。その驚きが、私の好奇心に火をつけました。兄の背中が、未知の科学への入り口でした。



高校時代 禁断の「JA1Y**」

高校に進学した私は、吸い寄せられるようにアマチュア無線部の部室へ足が向きました。正式な部員として登録していた訳ではありませんでしたが、無線機の放つ独特の熱気と、ノイズの向こう側に広がる世界に魅了され、昼休みは決まって部室の椅子に座っていました。「CQ CQ CQ こちらはJA1Y**」、マイクを握り、無線局のコールサインを連呼します。国内はおろか、時には海を越えた海外の局から応答があった時の興奮と言ったら言いようがありません。交信に夢中になるあまり、昼休みの終わりを告げる予鈴さえ耳に入りません。気がつけば午後の授業が始まっており、教室へ駆け込むこともしばしばでした。先生は私が遅刻する理由を百も承知でした。厳しく叱咤されることはなく、「また無線か」と苦笑い混じりの注意で済んでいたのは、良き時代のおおらかさだったのかもしれませんが。そして、これは今だから言える時効の話ですが、当時はまだ電波を出すための国家資格を持っていませんでした。資格よりも先に、電波を飛ばしたいという情熱が勝ってしまっていたのです。



大学時代 U先生の教えと「語呂合わせ」の罫

大学は電子工学科へ進み、学問としての通信を学び始めました。そこで出会った同級生のS君もまた、無線に深い関心を持っていました。彼の勧めで、私は本格的にモールス通信(電信)の習得を決意します。幸運なことに、大学にはかつて船舶の無線通信士として荒波の上で活躍されていたU先生がおられました。私は先生の門を叩き、モールス信号のいろはと、電鍵(キー)の正しい叩き方をお願いしました。「モールスを覚えるのに、『い』は『トツー(伊藤)』、『ろ』は『トツートツー(路上歩行)』、『は』は『ツートト(ハーモニカ)』と語呂合わせで覚える方法があるが、それはやめなさい。U先生の言葉は鋭いものでした。「初心者のうちには簡単だが、中級者になって速度が上がると、頭の中の語呂合わせが処理の邪魔をして壁にぶつかる。音そのものをリズムとして覚えなさい」とおっしゃった。また、電鍵(キー)の持ち方も「素人流ではなく、一生使える



本格的なフォームを身につけなさい」と厳しく指導されました。この時の教えが、50年後の今も私の指先を動かしています。金銭的に余裕のない学生寮生活でしたが、工夫は欠かしませんでした。簡単な送受信機を自作し、離れた部屋の友人と有線で結んで、夜な夜なモールの練習に励みました。他の寮生からは「あいつらは一体何をやっているんだ」と変な目で見られましたが、私たちにとっては、その「トントーン」という響きこそが最高のコミュニケーションだったのです。

築館町での普及活動 N360 と屋根のアンテナ

大学を卒業し、宮城県築館町(現栗原市)で職業訓練指導員の仕事が始まりました。ここで私の無線人生は「自分ひとりの楽しみ」から「周囲への普及」へと大きく舵を切ることになります。きっかけは、訓練生のS君でした。「先生と一緒に勉強して、免許を取りたいです」と言う彼の熱意に応える形で、私も改めて国家試験に挑みました。専門の知識があったため、試験はスムーズに合格し、念願のアマチュア無線技士となりました。すぐに50MHz帯の無線機を購入し、愛車のホンダN360の屋根にアンテナを取り付けました。小さな車体から伸びるアンテナは、どこへ行くにも私の誇りでした。下宿先の大家さんに無理を言って屋根の上に本格的なアンテナを立てさせてもらおうと、電波はさらに遠くまで飛ぶようになりました。この様子を見ていた学校の同僚たちから「自分たちもやってみたい」と声が上がりました。私は地元の無線同好会が計画していたJARL(日本アマチュア無線連盟)公認の講習会を誘致しようと動きまわりました。上司を説得し、学校の教室を会場として提供しました。結果、受講した10名の職員全員が合格し、職場全体が無線ブームに沸きました。職場旅行の際、車列を組んで無線で連絡を取り合いながら移動した風景は今思い出しても心が躍ります。



名古屋の熱狂 無線の輪と上級資格への挑戦

名古屋市への転勤後も、その勢いは加速しました。なんと25人もの同僚が「資格を取りたい」と言い出したのです。JARLの講習会を開催するには手続きが複雑すぎたため、私は自ら教鞭を執ることになりました。毎週土曜日の午後、自ら分かりやすく整理して書き下ろした自作テキストを手に、3ヶ月間にわたる熱血講義を行いました。結果、麻雀に熱中して欠席しがちだった方を除き、24名が国家合試験に合格しました。合格した10名がすぐに車にアンテナを立て、東海ブロックの野球大会などの遠征時に大活躍しました。他県の施設の職員が、アンテナをなびかせて走る私たちの車列を「一体何事か」と羨ましそうに眺めていたのは痛快でした。私自身も、さらなる高みを目指しました。電話級から電信級、さらに和文モールスが必須となる2級、そして最上位の1級へと特訓を重ねました。運転中に他車のクラクションが聞こえれば「あ、今の音は『T』だ」「今の短いのは『E』だ」と反射的に脳内変換してしまうほどの没入ぶりでした。念願の1級合格を果たした際、自分へのご褒美に奮発して購入したのが、重厚な大理石の台座を備えた電鍵です。この電鍵は、私の誇りの象徴として、半世紀が過ぎた今も変わらぬ輝きを放っています。



海外派遣 シンガポールでの出会い

国際協力専門家として派遣された海外生活、最初のイラン派遣では、仕事の忙しさに追われ無線機に触る余裕はありませんでしたが、次のシンガポールでは準備を整えて行きました。郵政省(当

時)から英文の証明書を取り寄せ、現地での運用に備えたのです。赴任先の学校には、日本から供与された立派な無線装置がありましたが、扱える先生がおらず梱包されたままの状態でした。私はそれを取り出し、簡易アンテナを設営しました。ある時、受信機から流れてきたのは軍用と思われる通信でした。私は即座にスイッチを切りました。「これは深入りしてはいけない」。技術者としての倫理と、異国での慎重さが働いた瞬間でした。現地では、副所長の F さんや地元の T 先生といった無線愛好家と知り合いました。特に F さんとは、無線の知識を通じて瞬く間に意気投合し、言葉の壁を越えた技術者同士の深い絆を結ぶことができました。



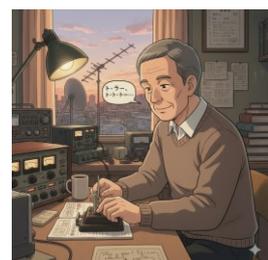
孫へ受け継がれた電波のバトン 2人の勉強会

帰国後、しばらくは多忙な日々と集合住宅でのアンテナ設置の難しさから、電波の世界から遠ざかっていました。しかし、思わぬ形で再会の時が訪れます。小学5年生の孫が、「おじいちゃん、僕もアマチュア無線の資格を取りたい。教えてほしい」と言ってきたのです。これほど嬉しい願いがあるでしょうか。私は二つ返事で引き受け、毎週末、1日2時間の「おじいちゃん先生の無線教室」を開講しました。小学生にとって、電気回路の基礎や複雑な無線法規を暗記するのは並大抵のことではありません。しかし、孫は一度も投げ出すことなく、真剣に机に向かい続けました。JARLの講習会当日、担当者から「小学生には修了試験は難しいかもしれませんよ」と釘を刺されましたが、4日間の講義を終えた孫の結果は、担当者が「小学生とは思えないほどの高得点です」と舌を巻くほどでした。晴れて無線局免許状を手にした後、近所に住む孫と自宅同士で電波を飛ばし合いました。自分たちで設置したアンテナから発せられた電波が、空を越えて孫の声を運んでくる、その喜びを共有できたことは、私の人生の宝物の一つです。



再びモールス通信と向き合う日々

今は、誰もがスマートフォンで世界中と繋がれる時代です。しかし、私にとってのモールス信号は、単なる通信手段ではありません。仕事を完全にリタイアした今、私は再びあの「大理石の電鍵」を手にとっています。50年前の指先の感覚は、驚くほど鮮明に残っていました。交信相手がいなくても、流れてくる符号に耳を傾けているだけで、不思議と心が穏やかに整っていきます。複雑な現代社会の喧騒から離れ、一点の曇りもない「トン・ツー」という純粋な音の世界に身を置くこと、それは、あの高校時代の部室で、あるいは学生寮の狭い部屋で、まだ見ぬ世界に憧れていた自分に戻る時間でもあります。モールス通信は、私に技術を教え、仲間を授け、孫との絆を繋いでくれました。これからもこの響きを「一生の友」として、静かに、そして豊かに人生の余白を埋めて行きたいと思っています。



(注)イラスト作成:生成AI(Gemini)

(大理石台座の電鍵)



(雪の栗駒山で交信)



(無線講習会で講義)



(無線部室で交信)

